



その23

申維翰

—しんゆはん—
1681年～没年不詳

(令和4年11月1日号—第341号)



申維翰^{しん ゆはん}は、1681年に朝鮮で生まれました。1713年に科擧^{かきよ}（官僚の登用試験）に合格、1719年（享保4年）には第9回朝鮮通信使一行の製述官（書記官）に選ばれ、来日しました。彼の文才は朝鮮の朝廷内で類まれなものと評されており、来日の際には、行く先々で日本の文人に詩文の交換を求められました。1748年（寛延元年）第10回朝鮮通信使訪日の際には、彼の消息を問う日本人も多かったそうです。

申維翰は、来日の際の道中日記と日本事情観察記をまとめた『海游録』^{かいゆうろく}を著し、江戸までの道中や日本の風俗、習慣について触れる中、枚方についても記しています。

『海游録』には、「薄暮^{はくぼ}の頃、平方（枚方）^{かんか}の館下にいたり、船を停めて食事をした。」とあり、「熟供^{じゅくきょう}（手の行き届いたごちそう）を用意していただいた。三使臣^{ししん}（朝鮮の使者）は船からおりず、余もまた船中に宿す。夜になって、霽月^{せいげつ}（雨上がりの月）は浦に満ち、棹^{さお}さして出発した。」と書いてあることから、枚方に夜半までとどまり、船上で食事をした様子がうかがえます。

朝鮮通信使は將軍の代替わりなどに来日し、江戸に向かう際には、多数の御座船^{ござぶね}で淀川を遡りました。川の流に逆らって船を進めるため、沿道から綱で船を引っ張る綱引人足^{つなひきにんそく}が動員されます。枚方宿周辺の村の人たちも、申維翰の乗った船を引っ張ったことでしょう。



淀川の河岸